こいねこ

北島夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
こいねこ

【Ｎコード】
Ｎ３３０２Ｚ

【作者名】
北島夏

【あらすじ】
幼いころに両親を失い、いつもふたりきりで過ごしてきたナオとみなも。
ある日突然、みなもの手が、猫の手に変わってしまいます。
あわてるナオとは反対に、みなもはというと、かわいいかわいいとのんきなもの。
ためいきをつくナオですが、そんなナオにも驚くことが起きます。
片思いの女の子にいきなり告白をされたのです。
クリスマスが近づく冬の日々を舞台にした、淡い恋物語です。

1／20

（1）

「かき揚そばと季節のご飯セット」
「だめだよぉ。ナオちゃんはカレイの煮つけご飯だよぉ」
「魚嫌いなんだよ」
「でも順番だもん。順番守らないとわたしがカレイの煮つけご飯だよぉ」
「好き嫌いは良くない」
「ナオちゃんだって。えへへ、わたしは、かき揚そばと季節のご飯セット〜♪」
「むー」
ここに来たときには毎回座るいつもの席。店員さんを呼んで、注文を済ませる。
しょうがない。嫌いだけど今日は魚だ。好き嫌いしていたら、このファミレスの全メニュー制覇なんてできないしな。
デザートに紅茶のシフォンケーキを追加してご機嫌のみなもから目を移して、窓の外を見る。
町はクリスマスカラー一色だ。緑と赤と白。通りの並木にはいろとりどりの電飾がまたたき、商店街の店先やショーウィンドウにはクリスマスツリーが飾られ、サンタやトナカイ、ふわふわの白雪のイラストや小物がにぎわっている。店から出て、通りを駅のほうにずーっと見晴るかせば、もちろん、何百万ドルの、とはいかないけど、思わず見とれてしまうクリスマスイルミネーションが続いているはずだ。
「……クリスマスだなぁ」
「クリスマスだねー」

いつの間にか、僕と同じく窓の外を眺めていたみなもが、セミロングのふわふわくせっけをゆらして、僕の何気ないつぶやきに同意する。

あいかわらずのにこにこおっとり口調。子供のころからずっとみなもはこんな調子で僕のとなりにいる。子供のころって言うか、生まれたときから、だな。僕とみなもは同じ日に同じ病院で生まれた。そしてとなり同士のベビーベッドに寝かされたのだから。

ほんと、くされ縁。いつまで続くんだろうね、僕たちは。

窓からみなもに顔をもどし、そんなことをふと考える。

みなもも窓から目をもどし視線が合うけど、べつに、なあに？とも訊いてこない。

とくになにか言いたくて見ていたわけじゃないことなんて、お互い目を見れば一瞬でわかるから。

……なんだかもう熟年夫婦の域だけど、でもそれも当然かな。

お互いもう両親を亡くしてから何年も経つ。それからずっと、ふたりだけの家族のようにして育ってきたんだから。

「クリスマス、今年はナオちゃんち？」

「うん。去年はみなもんちだったからね」

家族のように、兄妹（僕のほうが三十分くらい先に生まれた）のように育ってきたから、クリスマスも毎年一緒だ。となり同士の家だから、どっちでパーティをやっても変わらないのだけど、いちおう交代交代、お互いの家で開いている。ささやかな代わり映え、かな。

「チャンスだよ！　クリスマスなんてこのうえなくいい機会なんだから、告白しなよ。いまのまんまじゃ話だってまともにできないんだよ？」

背中越し、となりのとなりくらいに離れた席から威勢のいい声が聞こえてくる。女の子の声。きっと僕たちと同じくらいの年頃の。話し相手の子の声は喧騒にまぎれて僕の耳までは届いてこない。

「わたしもがんばるから。ね、一緒にがんばろっ！」

そんな会話が続いている。
ファミレス店内を見まわすと、もうすぐクリスマスなのが関係あるのかないのか、いつもは家族連れが多いのに、今日は恋人同士っぽいカップルがけっこうちらほら。意識してみれば、そういえばこのところずっとカップル率が高かった気もする。
クリスマスイヴって、そういえばそういうイベントの日なんだっけ。
僕にとってはいつもみなもとささやかなプレゼント交換をして、ちょっとおいしいものを食べる日なだけで、どきどきする出来事なんかとは無縁なのだけど。
「……クリスマスってさ」
「クリスマス？」
僕の目を見直して、小首を傾げるみなも。
と、そこで僕は、うーんと考え直す。
みなもとクリスマスカップルや恋愛の話？
照れくさくて、無理無理。
「んー、やっぱりいい」
「むう。あ、かき揚そばと季節のご飯、来たー」
途中で話をやめた僕に一瞬不満そうな顔をするけど、すぐに運ばれてきた料理に気をとられるみなも。
「ナオちゃんにも分けてあげるからね」
「みなもにも煮つけ分けてあげるよ」
「それはいらないよぉ」
僕のカレイの煮つけも運ばれてきて、いつもと同じ、ふたりで味見をしあいながらの食事が始まる。いつもどおり、これがおいしいあれがおいしい、これもらうな、あ、だめだよぉ、なんて話しながら。
でもクリスマスかぁ。
僕にだって気になっている子がいないわけではないけど、今年もいつもと同じ、みなもとふたりきりのクリスマスなんだろうな。

「あ。猫さんだよ、ナオちゃん」
やっぱり連日のファミレス通いってお金かかるよなぁなんて思いながらの帰り道、街路灯に照らされた民家の塀のうえに白い猫を見つけた。
大通りからはずれた住宅街の道筋。静かな夜に白い毛並みは輝くようでとても綺麗だった。
姿勢よく座って闇夜のどこかを見つめていた白い猫は、僕たちが立ち止まると、恐れて逃げることもなく、こちらを向いて、にゃあ、と鳴いた。
「かわいいよぉ、ナオちゃん。こんばんはー、猫さん」
僕にぱあっと笑顔を向けてから、みなもは猫に歩み寄る。
みなもがそっと手を近づけると、猫はぺろっと舌先でなめる。
「きゃう。かわいいかわいいかわいいよぉ！」
「猫だからねー」
「猫さんだからかぁ。ふわぁ、もうもうもうもうかわいいよぉ！」
白猫は人慣れしているのか、目を細め、ごろごろと喉を鳴らして、みなもに撫でられるがままになっている。「にゃんにゃん。にゃにゃ？　にゃあーん」
「なんだって？」
ご機嫌に猫語を操るみなもにのってあげる。
「魚嫌いはだめだよ、って」
「それはみなももだろ」
そんなことを話していると、白猫は、ふ、と誰かに呼ばれたように闇に沈んだ路地の先に顔を向ける。そしてあっという間に身をひるがえして、僕たちの前から去ってしまう。
「行っちゃった」
「行っちゃったね」
僕は少しの間、猫の消えた闇を見つめていた。夜の白猫なんて、

なんだかちょっと幻想的な光景だったな、なんて思いながら。
みなもはというと、ぽーっとした表情でやっぱり猫の消えた闇を見ていた。みなもがぽーっとしているのはよくあることだけど。……と思っていたら、急に、
「猫さんはいいなぁ」
とぽつりともらす。遠いどこかを見ているような、夢見ているような、そんな声。
なんだろう、とちょっといつもとちがうみなもを感じた気がしたけど、僕はコートの襟を正しながら、その言葉を聞いてまず思ったことを率直に言った。
「……いまの季節、寒いと思うけど？」
さっきの猫、首輪がついてなかったけど、寒い冬の夜はどうやって過ごしているんだろう。
「ううん。いつでもこうしていられるから、寒くないんだよ」
そう言って、みなもは僕のポケットのなかに冷たくなった手を入れてきて、僕の手を握る。
「わ。冷たっ」
「心があったかい証拠なんだよぉ」
にぱぁとなにがそんなにうれしいのか、しあわせそうにみなもは笑う。
「ずーっとこうしていたいなぁ」
「なに言ってんだか」
ずっとこうしてきたでしょーが。いつもふたりで。
結局、猫のことがうらやましいのと手をつなぐことになんの関係があるのかはさっぱりわからなかったけど、だんだんぬくぬくとしてきたみなもの手はあたたかくて、僕たちはそれからずっと手をつなぎながら、家まで帰った。

（2）へ続く

2／20

（2）

翌日、一二月一九日、驚くことが二つも起きた。

ひとつは朝。

登校準備を整え、いつもどおりに家の前で待っていると、普段よりも少し遅れて家を出てきたみなもが、開口一番、こう言った。

「ナオちゃん、ナオちゃん！　手が猫になっちゃったの。にゃん♪」

そう言うみなもの左腕には、肘から指先まで、包帯がぐるぐると不恰好に巻いてある。

「さ。急がないと学校遅刻するよ」

みなもは学校に向かってさっさと歩き出そうとする僕の手を右手でひっぱって、もう一度言う。

「手が猫になっちゃったの。にゃん♪」

しつこいなぁ。

しょうがないので僕は黙って、みなもの左腕の包帯を解く。

と。

にゃ～ん。

「……え。なにこれ」

そこには、猫の手があった。

「猫の手だよ」

そう。

猫の手だ。

薄茶色のふわふわした毛並みに、やわらかそうな桃色の肉球のついたまるっこい指先。

まぎれもなく、猫の手。
僕はもう一度繰り返した。
「え。なにこれ」
「猫の手だよ」
みなもも繰り返す。
らちがあかない。
「いやだから、そうじゃなくて、どうしてこんなことに？」
おもちゃかなにかをはめてのいたずらではないのは、一目でわかった。だって肘から上のきめこまやかなみなもの肌との間に、継ぎ目がない。そもそもこれがおもちゃだったとするなら、それをはめたみなもの腕は、いまどんな風に変形しているのだろう。そんな変形、人としてありえない。だから、これは本物だ。
手にとって握ってみると……あ、ふわっとして、あったかくて、気持ちいい。思わずふにふにと握ってしまう。
「あん、くすぐったいよぉ」
くすくすと笑うみなも。
自分の手が猫になっているというのに、焦りも緊張感も、まったくない。
みなもらしいけど、ここはびしっと言う。
「みなも」
少し強めに名前を呼ぶ。
「なあに？　ナオちゃん」
僕がせっかく真面目な声を出しても、みなもはきょとんするだけだ。まあ、話を聞いてくれるならいいけど。
「みなも。どうしてこんなことになっているの？」
あらためて訊く。
みなもは、ん～、と考え、
「猫さんになりたい、って思ったから？」
聞き返されても困るけど。そもそも。
「思ったからって、普通そんな簡単に猫にはなれないでしょ」

苦労すればなれるってものでもないだろうけど。
「うーん。そっかぁ」
「いつ、こうなったの」
「朝起きたらね、猫さんになってたの」
くいくい、と猫招きをしてみせて、楽しそうに言うみなも。
「なにか思い当たる節はないの？　そう、なっちゃったことに」
「んー、だから、猫さんはいいなー、なりたいなって」
「それ以外に。魔法とか、変な薬飲んだとか、なにかの呪いとか」
なにばかばかしい単語並べてるんだ僕は。と思いながらも、でもこれってあきらかに普通じゃない。本当に、みなもの手が猫の手になっているのだから。
だから、そのばかばかしい単語も、僕は真面目にくちにしたのだけど、
「呪いは怖いよぉ。お星さまにお願い、とかのほうがかわいいな」
とみなもは、ずれた反応を返してくる。
みなもとの話が脱線しがちなことはいつものことなので、僕は気にしない。
「猫にいじわるしたりしなかった？」
「むう。するわけないよぉ！　猫さん、大好きだもん」
知ってるでしょお？　と僕にすねた目を向けるみなも。
うん、たしかに知ってる。僕とみなもは猫が大好きだ。飼ったことはないけれども、昔から、道端で見かければ必ず足を止めて、話しかけたりおやつをあげたりしてきた。
「そうだよね。じゃあ、なんでだろう。……っていうか、さっきからなんでそんなにのん気なの！」
自分の身体の一部が人外になってしまったというのに、みなもはむしろご機嫌だ。さっきからにこにこしながら、自分の猫手を曲げたり伸ばしたり、てのひらを開いたり閉じたりして遊びながら話している。そう言えば開口一番、にゃん、なんて言ってたっけ。
僕が、む、とにらんでもみなもは、

「だってかわいいよ？」
くいくい、と招き招き。
どんなときでものん気なのはみなもの長所でも短所でもあるんだよな。
僕は、はあ、とため息をひとつつくと言う。
「でも困るでしょ。それじゃあ」
「困るかな？　あ。鉄棒の授業のときは困るね。鉄棒、掴めないから、逆上がりのテストに落ちちゃうよ」
鉄棒。それはたしかに困るだろう。高校の授業に逆上がりのテストはないと思うけど。
でもそんなことじゃなくてさ。
「誰かに見られたら困るでしょっ。すぐにうわさになって、保健所に連れて行かれちゃうよっ。……もしかしたら政府に捕まって、解剖されちゃうかもしれない」
僕が脅かすように言うと、みなもはぷくうっとほおをふくらます。
「そんなにばかじゃないよぉ。だから包帯巻いてきたんだもん。ナオちゃん以外には見せないからぁ、だーいじょーぶ」
そう言いながら、にゃんにゃん、と招き猫。
「左手は人招き～♪」
「だからなんでそんなに緊張感がないのさ……」
言ってもしょうがないこととは思いつつ、僕はまたもため息。
「んー。猫さんになるのもいいかなって」
「いいわけないでしょ！」
「かわいいのに……」
しゅんとなるみなも。
まったくもう。
まあ、たしかにかわいいけどさ。
と、そこでふと思った。
「ねえ。猫になったのは左手だけ？　脚……は大丈夫そうだね。尻尾とか生えてない？」

脚は、いつもどおりのほそっこいのがスカートの裾からのぞいている。でも服のなかまではわからない。
「んー、大丈夫だよ。ほら、尻尾は生えてないよ」
そう言いながらみなもはスカートをめくってみせる。
うすピンク色の布地がちらっと見える。
「はしたないからやめなさい」
すぐにスカートを元にもどさせる。
まったく。僕が相手だと羞恥心働かないんだから。
今日何度目かのため息を僕がついていると、ふいにみなもが言う。
「ねーね、ナオちゃん。もうそろそろ学校行かないと、遅刻だよ？」
あ、忘れてた。
じゃなくて！
「そんなことよりも、その手のほうが問題だよ」
「包帯巻いておけば大丈夫だよぉ。ほら、ナオちゃんナオちゃん」
「あ、うん」
人通りはないとはいえ、いちおうここも往来だったのを思い出して、言われるままに包帯を巻くのを手伝う。
「さ。今日も元気に、がっこ、いこー！」
包帯を巻き終えると、たぶん怪我をしたって言い訳をするのだろうに、その左手を、おー、とふりあげて、スキップをするように歩き出すみなも。
「いや、だからさぁ！」
人間の手が猫の手になってしまうってことがどれだけ異常なことか、みなもは本当にわかっているんだろうか、とても怪しかった。

その日、たしかに包帯を巻いていればとりあえず問題はなかった。さいわい、僕とみなもは同じ二年A組。授業中のノート取りをしてあげることもできたし、心配するクラスメートたちには話をあわせて説明することも出来た。

ちなみに包帯の訳は、家の階段から滑り落ちて筋を違えてしまったことにしておいた。骨折、なんて大げさな理由にしてしまったら、腕が元にもどったあとが面倒だったから。すぐにみなもの腕がもとにもどるなんて保証はもちろんなかったけど、当の本人であるみなもがのん気なものだから、あまり深刻になれなかったというのもある。　よく考えてみれば、いや考えてみなくても、とんでもないことが起こっているのに……。

驚いたことのもうひとつは、放課後に起きた。

女の子に告白されたのだ。

しかもその相手は織部ちかさんだ。

僕やみなもと同じクラスの織部ちかさんは、僕がほのかに想いを寄せている相手、つまり片思いをしている女の子だったのだ。

背が低すぎるわけではないけど全体的に小づくりで小動物ちっくな織部さんには、活発なイメージはない。声の大きな元気な女の子が多いうちのクラスでは、おとなしくてあまりめだたないポジションにいると思う。でも暗いわけじゃなくて、いつもおだやかに笑っている子で、さりげない気配りが上手な子だ。週番が忘れがちな花瓶の水の入れ替えをしょっちゅう代わりにやっているのを僕は知っているし、化学の実験のときに他班がかたづけ忘れたビーカーを棚にもどしてあげたり……ってこれじゃまるで僕が織部さんの行動を逐一観察しているストーカーみたいだけど、ともかく、ふと見るととくに誰に告げることもなくさりげなく心遣いをしている少女なのだ。そんな織部さんを見ているうちに、いい子だなと思い始めて、いつのまにか僕のなかで気になる女の子になっていた。　その織部さんに告白されたのだ。

好きです、って。

つきあってくださいませんか、って。

放課後の屋上で、肩のところで切りそろえたまっすぐな黒髪をゆ

らし、真っ赤な顔をした織部さんに。
そのとき僕は、ぽかん、としてしまった。
放課後お時間ありませんか、と聞かれたときに、まさか、と思ってどきどきはしていたのだけど、本当にその言葉を聞いたときには、なんだかぽーっとしてしまった。
その次に僕は混乱した。
僕はそのときまで、織部さんとはほとんどくちをきいたことがなかった。
だから、直接僕に向けられた織部さんの透明な声がすごくかわいくて感動してしまって。それから、どうして僕なんかを好きになってくれたんだろうってわからなくて。
そしてわからないながらも、好きな女の子からの好きですって告白に僕の頭には血が上ってしまって、顔がかっと熱くなる。
「あ、あの。急に変なことを言ってごめんなさいっ」
僕が言葉を返せずにいると、ますます赤くなりながら織部さんが頭を下げた。
「え、あ、ううん。こっちこそ、ごめん！」
ごめん、という言葉に、織部さんが固くなるのがわかったので、あわてて言葉を続けた。
「あ、そうじゃなくて、えと、急だったからびっくりして、それで言葉が出て来なくて、そのことを、ごめん、って」
焦った僕は、しどろもどろになりながら言い訳をした。
「そ、そそそうでしたか。その、そうですよね。急ですよね。えと、その……」
織部さんもしどろもどろになりながらそう答え、そこで、くちごもってしまう。
「……」
「……」
どうしていいかわからず、二人無言で立ち尽くしてしまう。
って、ちがうちがう！　織部さんは気持ちを伝えてくれたんだか

ら、今度は僕が返事をする番なんだ。内気そうな織部さんがこんなにがんばってくれているのに、僕はなにをもたもたしているんだ。返事を、返事をしなくちゃ！

「えと、その、ぼ、僕の気持ちは――」

そこまでくちにしたところで、織部さんが緊張に耐えられなくなったようだった。

「あ、あのっ。そ、そのっ、きゅ、急でしたから、そのっ、返事はいまじゃなくてもっ」

ちらちらと屋上の入り口を見ながらいまにも泣き出しそうな顔で織部さんは言う。

「え、でも僕は織部さんのこと――」

「ごめんなさいっ！」

がばっと頭を下げると、織部さんは入り口に向かって走り出してしまった。

一瞬あっけにとられたけれども、織部さんが入り口に姿を消す前に、急いで言う。

「織部さんっ、ありがとうっ！」

僕の声に織部さんはドアの前で立ち止まり、ぺこりともう一度頭を下げた。

それからすぐに、逃げるように織部さんはドアのなかに入ってしまったけれど、頭を上げたときの織部さんは、目は涙でにじんでいたけど、くちもとにはちいさな笑みを浮かべてくれていた。

（3）へ続く

3／20

（3）

「ナオちゃん、またお魚料理だねー」
「そうだねー」
「わたしも魚料理だよー」
「そうだねー」
「ナオちゃんが魚料理二つ食べて、わたしは次のを注文してもいい？」
「いいよー」
と流しかけ、
「って待ちなさい。そんなに食べられないって」
「むう。作戦失敗」
悪びれる様子のないみなもにため息をつく。
「まったく。ひとのしあわせにつけこんで」
「しあわせにはつけこんでもいい気がする」
「う……」
そうかもしれない。
いやいや、でも魚料理二つ、っていうか、そもそも二人前は無理。このファミレス、ライスの量やたら多いいんだから。
「よかったね」
「まあね。ほお、ゆるんでる？」
「ゆるみっぱなしだよぉ」
あれから、気がつくと織部さんのことを考えている。頭がふわふわして……正直言って、夢心地だ。すぐに織部さんの別れ際のちいさなかわいい笑みが頭に思い浮かんで、ぽーっとしてしまって、なんだかしあわせな気分で脳味噌がゆだっている。

織部さんに告白されたことは、すぐにみなもに話した。僕とみなもは、昔からお互いに起こったことはすべて話しあう。そりゃ、男の子のこととか、女の子のこととか、小学校の体育の時間に教室を分けられて説明されたような、微妙な話題はしないけれども。織部さんのこともそうだ。織部さんのさりげない心配りのことやちょっと気になっていることなどは以前に話したことがある。織部さんの心配りについては、みなもも気がついていたそうだ。女の子からしてもちかちゃんは好かれる子なんだよ、とみなもも太鼓判を押していたので、告白された、と報告したら喜んでくれた。

「でもごめんな。はしゃいじゃって」

少し冷静になって、僕はみなもにあやまる。

「うん？」

みなもはわけがわからないようで小首をかしげる。

「だって、みなもの手が猫になっているほうが大問題なのにさ」

「そんなのいいよぉ。それに、考えたって、どうしたらいいかわからないもん」

みなもは気楽に笑っている。

もちろん、「そんなのいいよぉ」なわけはないんだけど、でもそうなんだよな。

猫になってしまった手を元にもどす方法なんて、さっぱりわからない。

これでも、放課後になるまでは——織部さんに告白されるまでは——さんざん頭を悩ましたのだ。

でもどうしたらいいか、なんて、対処療法さえも思いつかない。やっぱり誰かに相談したほうがいいのだろうか。友達……は、まず役に立たない。役に立たないって言い方は悪いけど、話したところで僕たちと同じくこうやって途方にくれるだけだ。警察や病院？ううん、公の力に頼るのは不安だ。みなもがどこかに連れて行かれてしまうかもしれない。どこかに隔離されて二度と会えなくなるかもしれない。そんなのはだめだ。後見人の佐藤さんと田中さん？

ううん、あのひとたちが真剣に僕たちの気持ちをくんでくれるわけがない。たぶん警察か保健所か病院か、とにかくそういうところに通報して終わりだ。
だめだ。
やっぱりなにも思いつかない。
僕が悩んでいると、ウェイトレスさんが注文をとりに来た。みなもがメニューを読み上げている。
サバの味噌煮セット、ブリの照り焼きセット、カルボナーラ、かぼちゃプリン、モンブラン、ドリンクセット×2　うん、ちゃんとモンブランを頼んでくれている。さすが幼なじみ。僕の好きなものをよくわかってる。頭の片隅で、なんとなくメニューを反芻しながらぼんやりと思う。
って！
「なに魚料理ふたつも頼んでるの！　食べられないって言ったでしょ！」
「大丈夫だよ。ひとつはふたりで食べよ？」
「食べよ？　じゃないよ。そんなに魚嫌いなの？」
「むう。ナオちゃんだって嫌いなくせに」
「まだ間に合う。キャンセルしよ」
僕がウェイトレスさんを呼ぶために手を上げようとすると、
「ああん。ちがうのちがうの」
とあわてて僕の手を左手で掴む。
別に怪我をしているのではないわけだけど、包帯の巻かれた腕をばたばたしている姿がなんとも痛々しい気がしたので（というかはたからはそう見えるだろうから）、とりあえず僕は手を下げる。
「なにがちがうの」
僕は訊く。
「あのね。一品多く頼んでいくと、クリスマスイヴイヴまでに全品食べ終われるんだよ」
「え。ほんとに？　……ううん、でもべつに無理してクリスマスま

でに終わらせることないでしょ」
「でもお、クリスマスイヴはちかちゃんと一緒でしょ？　だったらそれまでにきっちり終わらせないと」
「意味わかんないけど。だいたい織部さんとそんな約束してないよ」
「でもちかちゃんはきっとイヴの夜は会いたいって思っているよ。女の子だもん」
　そういうものだろうか。
　でも。
「いやでも、クリスマスパーティーは毎年みなもとやってるじゃないか。今年だって変わらないよ」
　僕は簡単に割り切るみなもに抵抗を感じて、言い返す。
「うん。だから、わたしとのクリスマスパーティーはお昼にやるの。それで夜はちかちゃんに会いに行くの」
「でも」
「もお。ナオちゃん、これからはちゃんと女の子の気持ち考えるようにしないと、織部さんに嫌われちゃうぞっ」
　自分だって、男の子とつきあったことなんかないくせに、えらそうにお姉さん口調で言うみなもに、なんだかちょっとむっとしたけど、でも、みなもの言うとおりなのかもしれない。みなもだっていちおう女の子なんだし、女の子の気持ちは僕よりもわかるだろう。それに、クリスマスイヴを織部さんと過ごせるなんて、もちろん僕はすごくうれしい。織部さんとデートって考えただけで、緊張でどきどきしてきてしまって逃げ出したい気持ちにもなるけど、すごく、とても、めちゃくちゃ、めちゃめちゃ、うれしい。
　でも。
「うーん」
　やっぱり、さっぱりしないものが残る。
　それは、毎年毎年続けてきたみなもとのパーティが、ないがしろになってしまうこと。中止になるわけじゃないけど、なんだかおまけというか、前座というか、そんな感じになってしまうこと。

それがどうにもひっかかる。
……しょうがないことなのかな？
このままうまくいって僕に織部さんという恋人ができて、そしてみなもにもそのうち恋人ができたとしたら、僕とみなも、ふたりで過ごす時間はどんどん減っていってしまうのだろう。いまは同じ学校に通っているけど、大学はどうだろう。進路がちがえば、会えるのは朝と夜だけになってしまうだろう。もし同じ大学に進んでも、そのあとには就職だって控える。どこまで一緒にいられるかなんて、わからない。それはきっと、大人になるということだから、生きていくということだから、しかたのないことなんだろうけど……。
「ナオちゃん、難しい顔をしているよ？」
「え？　そう？」
沈んでいた考えから意識をもどすと、目の前には、すでにあいかわらずなんにも考えていなさそうなのんびりにこにこ笑顔にもどったみなもがいる。
「そのうちシワが深くなって、はんにゃー、ってなっちゃうかも」
般若の、にゃー、のところで、みなもは猫の手を、くいっくいっ。
はあ……。
一気に脱力した。真剣に考えて損した気分になる。
やがて料理が運ばれてきた。
サバの味噌煮セット。
ブリの照り焼きセット。
カルボナーラ。
「あのさ」
「うん？」
「一品はふたりで食べるとか言ってたけど、みなもはそんなに食べられるの？」
みなもの前にはカルボナーラがある。食事としてはパスタはライトだけど、ここの料理はどれもけっこう量が多い。カルボナーラも、一・五人前とまでは言わずとも、かなりこんもりと盛りつけされて

いる。
「え？　うーんと……てへ？」
疑問系で言うんじゃない。
けっきょく僕が無理してサバとブリのほとんどを片付けなければならないみたいだ。
「まったく……」
「てへへ」
もしかしたら、みなもはパスタさえも食べきれず、僕に押しつけるかもしれない。デザートはちゃんと食べるくせに。そういえば昔からいまにいたるまで、みなもと食事をするといつもこんな感じだよなぁ。

（4）へ続く

4／20

（4）

みなもとはじめてファミリーレストランに行ったときのことを、僕はまだはっきりと憶えている。

小学校に上がる前。僕の両親もみなもの両親もまだ健在だったころだ。

その日はクリスマスイヴで、僕たちのような家族連れで店内はあふれかえっていて、席に案内されるまでにけっこう待たされたのを憶えている。順番を待つあいだ、みなもとふたりでドアの窓にはりつき、ひらひらと舞い降りてくる雪が店内から漏れる光にきらきらと輝くのを飽きもせずに眺め続けていた記憶も、ぼんやりと脳裏に残っている。

やがて席に案内された僕たち二家族で、最初にメニューを決めたのは僕とみなもだ。窓の外を眺めるのと同じくらい飽きることなくショウウィンドウのメニューを眺めていた僕たちは、席につくなり、お子様ランチ！　と声を合わせた。

ちいさなハンバーグとスパゲティとオムライス、それからちょこんとクリームののったプリンのセットというごくありきたりのお子様セット。オムライスにはお約束の旗ものっている。なによりも惹かれたのはオマケでおもちゃがついてくること。高校生になった僕なんかから見たら、本当にたわいのないお菓子のオマケ程度のものなんだけど、そのころの僕やみなもにとっては、大好きなハンバーグやスパゲティやプリンが一度に食べられて、そのうえおもちゃまでもらえるなんて、夢のようだった。

おもちゃは子供のてのひらにおさまるくらいのちいさな箱に入っていて、それがさらにファンシーなまるっこい星柄のプリントされ

た紙袋に入れられていた。ショウウィンドウにも箱の中身は飾られていなかったので、なにが入っているかはわからない。
優先的に作ることになっているのだろうか、おこさまランチはすぐに運ばれてきた。もちろん、僕とみなもは早くそのおもちゃの中身を見たかったのだけど、ご飯を食べ終わってからねと親におあずけをくらっていた。だから、僕とみなもは、大好きなハンバーグやスパゲティを夢中で食べた。
さきに食べ終わったのはいつものように僕だった。好き嫌いはないけれども元来のんびり屋であまり量も多く食べられないみなもは、どちらかの家に集まっての二家族での夕食のときでも、いつも最後まで食べている。そのときもそうだった。一所懸命、フォークやスプーンをくちに運んでいるのだけど、気ばかり焦ってしょっちゅうこぼすものだからなかなかお子様ランチプレートのうえの料理が減らない。
ご飯を食べ終わったのだから、僕はもう、おもちゃの中身を見てもいいはずだった。でも、みなもの懸命な姿と、なにより親たちからの無言のプレッシャーを子供心に感じ、じっと我慢していた。
そのうちみなもがぽろぽろと泣き出した。
ぐすぐすと鼻をすすりながらくちにする言葉はよく聴こえなかったけど、どうやら、ごめんね、ごめんね、とあやまっているようだった。
そのときやっと僕は気がついた。
のんびり屋のみなもが、今日に限って焦っていたのは、僕を待たせないためだったのだと。そういえばそうだ。いつだってのん気でスローペースのみなもなんだから、ほんの少しの時間、おもちゃの箱が開けられないからって焦るはずもない。みなもが気にしていたのは、箱の中身じゃなくて僕のことだったのだ。
涙がぽたぽたテーブルに落ちるのを見て、僕は反省した。急かす言葉をくちにしたわけではなかったけど、そのときの僕はあきらかに箱を開けたくてうずうずしていた。つまり、みなも早く食べ終わ

れよぉ、とたぶん顔に出してしまっていた。みなもは、お子様ランチが届いたそのときから焦って食べていた。はじめから、僕を待たせてしまわないために急いでいたのだ。それがわかったから、僕は反省した。そして言った。

ゆっくりたべていいよ、みなも。それにおなかいっぱいになったらいえよ。ぼくがたべてあげるから。このあいだみたいにおなかこわしたらたいへんだからな。

みなもは、みなもの小食を気にかける親を心配させないように、無理をして食べてお腹を壊したことがあったのだ。もちろん、そのころのみなもの両親がそんな心配をしていたことや、みなもが心配かけないように無理をしたことをちゃんと理解したのは、それからずいぶんとあとになってからのことだったけど。

僕がはげますように言うと、みなもは、うん、と顔をほころばせた。

いま泣いたカラスがもう笑った、と親たちが愉快そうに笑ったのを憶えている。

その雰囲気に安心したのか、やはりもうお腹いっぱいいっぱいだったみなもはすぐに、もう食べられないの、と僕に助けを求め、親たちも僕たちのやり取りをほほえましげに見ているだけだったので、僕がみなもの残した料理を食べた。

そうして、ようやくご飯を食べ終わった僕とみなもはにっこり笑いあい、さっそくオマケのおもちゃの開封にとりかかった。

ごそごそと紙袋から箱を取り出して――そこで気がつけばよかったのに――開封して、僕は落胆した。

箱のなかには綿がつめられていて、そのなかにビニールに入ったおもちゃの指輪が入っていたのだ。しかもピンク色の、大きなハート型のガラス玉のくっついた、どう見ても女の子用の。つまり、おもちゃは男の子用と女の子用があったのだけど、あやまって僕のまで女の子用が来てしまっていたのだ。そういえば箱にはかわいらしいくまやうさぎの顔の描かれたいかにも女の子用ですって柄だった

のに。男の子用の飛行機や電車の柄じゃなかったのに。
期待していたぶん僕はがっかりして、目元に涙が浮かんでしまった。
たぶん、親が店員に事情を話してくれれば、男の子用をあらためて用意してくれたことだろう。
しかし僕の目から涙がこぼれ落ちる前に、す、と目の前にちいさなてのひらが差し出された。そこには、やはりハート型だけど、青いガラスの嵌ったおもちゃの指輪がのっていた。顔をあげると、そこにはみなもの真剣な顔があった。
みなもは言った。
ナオちゃん、あおはおとこのこのいろだよ。だからこうかんしよ？
交換して青いものになったところで、ハート型の指輪はハート型の指輪だ。男の子の僕にとっては、正直何も変わらない。でも、青がみなもの大好きな色だということを、僕は知っていた。
ね、ナオちゃん。こうかんしよ？
いつになく真剣な表情のみなもに、僕は気圧された。涙も引っ込んだ。
みなもはきっと、僕のピンチを救おうとしているのだ、そう思った。実際は、店員に事情を話せばいいだけなのだからお門違いもいいところなのだけど、でもみなもはそのとき真剣だった。
だから僕は指輪を交換した。
ピンクの指輪をみなもの手にはめてあげた。
青い指輪をみなもは僕の手にはめてくれた。
成り行きを見守っていた両親たちは、さっき僕がみなもをはげましたとき以上に、愉快そうにはしゃいだ。　みなもの両親が言った。
ナオちゃん、みなものこと、よろしくね。
よろしくな、ナオくん。
う、うん。
よくわからなかったけど、僕はうなづいた。
よろしくね。

ただ親の真似をしただけだったのだろう、僕と同じく、やっぱりわけがわからなかっただろうみなもまで同じことを言ったので、やっぱり僕は、

うん。

とうなづいた。

それから今度は僕の両親とみなものあいだで同じようなやりとりがあって、僕とみなもはきょとんとしていたのだけど、もちろん、いまではそのときどうして両親が楽しそうにしていたのかの理由もわかる。

つまりはからずも、僕とみなもは指輪交換をしていたってことだ。

そりゃ、まるで家族のように仲が良かった両親たちにしてみれば、お互いの子供たちのそんな様子は、良い見ものだっただろう。

あのときの青い指輪は、一時期この町から引っ越していたときのどさくさでいまはどこにしまってあるのかわからなくなっているのだけど、いつもはおっとりのみなもの一所懸命さや、両親たちの楽しげな笑顔が印象的だったその日のことは、いまだに驚くほど鮮明に憶えている。

ちなみにそれ以降、みなもが残す料理は僕が片付けるのが約束事になり、みなもの好きな色は青からピンクになった。

――と、思い出に浸っているうちにも食は進み、僕はブリの照り焼きセットを食べ終わる。あいかわらず食事の遅いみなもはまだカルボナーラをくるくるとフォークに巻きつけている。

僕はサバの味噌煮をきっちり半分に切り分け、片方をみなもの側に寄せる。

「これ、なあに？」

みなもがきょとんと訊いてくる。

いやいや、きょとんとするんじゃないってば。

「半分ずつ食べるって言ったじゃない」

僕が言うと、みなもはおそるおそるといった様子で答える。

「えと。わたし、もうお腹いっぱい……」

どうせそんなことだろうとは思ったんだけどね。
「猫なんだから魚好きでしょ」
僕は包帯を巻いたみなもの左手を見ながら言う。
「魚が嫌いな猫もいると思う」
「いや、いないと思うけど」
わからないけど、実際、そういう話は聞いたことがない。
「いじわるぅ」
上目遣いですねた顔をするみなも。
はあ。
「だから無理に注文しないほうがいいって言ったのに」
「むう」
……ま、いいけどね。

（5）へ続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3302z/

こいねこ

2011年12月14日12時47分発行